国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

真垣逦有米

一編上

208
15
693

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

序

春色雛之梅

春者百花の魁なれば梅の花

現く垣根に傳へて

香をめでゝ其色を愛し

遥に一年を過の枝迷梅の花は叶ひる。聽

那の末より彼此序へうけて此度

とゝの出版りも前編より繼て時号

国立国会図書館　春色雛之梅 15巻 208-693

ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

春色籬の梅巻之四

江戸　爲永春水著

第七回

枝ぶり目うつくしき梅が香紙羽織の袖ふ留て鶯の夢も閑清き春の庭梅見ハお然が河の鶯より流人の先立たぐ一人酌り寂しく思ひ心祈るく休息の間も立ぐふ待ち侘て掾側の淋しきを哀せ梅ヘ湯よりてあるくハもア

ちゃの掾側へ来ル。「アイ久しぶりで私宅の洗湯へ送

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

入ちゃくさうそう竟長湯をして迷上きまりショト 梅側へ来り
梅男の 前ハ 安達 ゑん「アヤ」ーグラ ゑんをいうーきまる 梅へ左
梅ごらうとゞて 行程通ー駕籠でも 旅ろう 帰りて来てハ
アア 四人目ハ ゑんぶ 重れのサ 今ハ 表町の 按摩さんが来る
きまるごトキニ 島雅さんや 行くハ 行程しまるのゞ先刺の
きまるでハ 箱根へ 往こと ゑん 往ろうの 相談ごを 言うゞ 実正の
変ろう ゑん「アレサ 変でゞきて ナニ 私が一人いそひで 先へ帰ま
きまるものゝ ゑん紙で 左程 中ても ゑんとゞ ゑんきさんが 余

計に 苦労 ゑきまるごらうと思ひて ゑんひで 帰りて来まるアル
梅「ゑ 箱根へ まる 相談よ ゑんるのゞ ノウ 島雅さんも 余ま 平
氣ゑ ゑんるス ゑん「アレサ 左程 ゑんぶ思ひ ゑんきさんの 不宮遠ひ
であまきまるョ 江の 湯ろう 変ハ 箱根の 湯治とハ 変ハゑん
のハ ゑんさんの 病氣ゑ ゑんぶうのよ 分て その 相談よ きまりて
私ゑ 先へ 帰るのであまきまるハ 子 梅「ア ゑんゑ ゑんが 病氣ゑ
行程 ハ 旅ごらう 小児 同様の ゑんゑ 湯治よ 行程ゑ 病氣ゑ
ゑんるゑハ 行程 ゑんのごらうノウ ゑん「イエ ゑんが 行でも 海の

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

端で毒虫かでも刺さしたのか　何ぞ海の毒か中らさしたのか
終日海の端で遊んで。方へ帰りてあるを老人悪風ぐするを
お言ひで一時ばかり眠つて目を覚しばらく側へ付て業
でもあるかと言ばかり見るを自分大変か腹よりて臭きを
悪ひ様か思ふまるー　何様も変ばを会入見るから胸のあと
ばが真赤か成て見るから　疑を明て見るをばくるあと　仮紙
梅田の見世の遊女　輪廓て腫よりて居るんでありまして
ばかの新ばひつくりしてまやとのくらが　女が中と腫を潰して

マガキ四ノ二

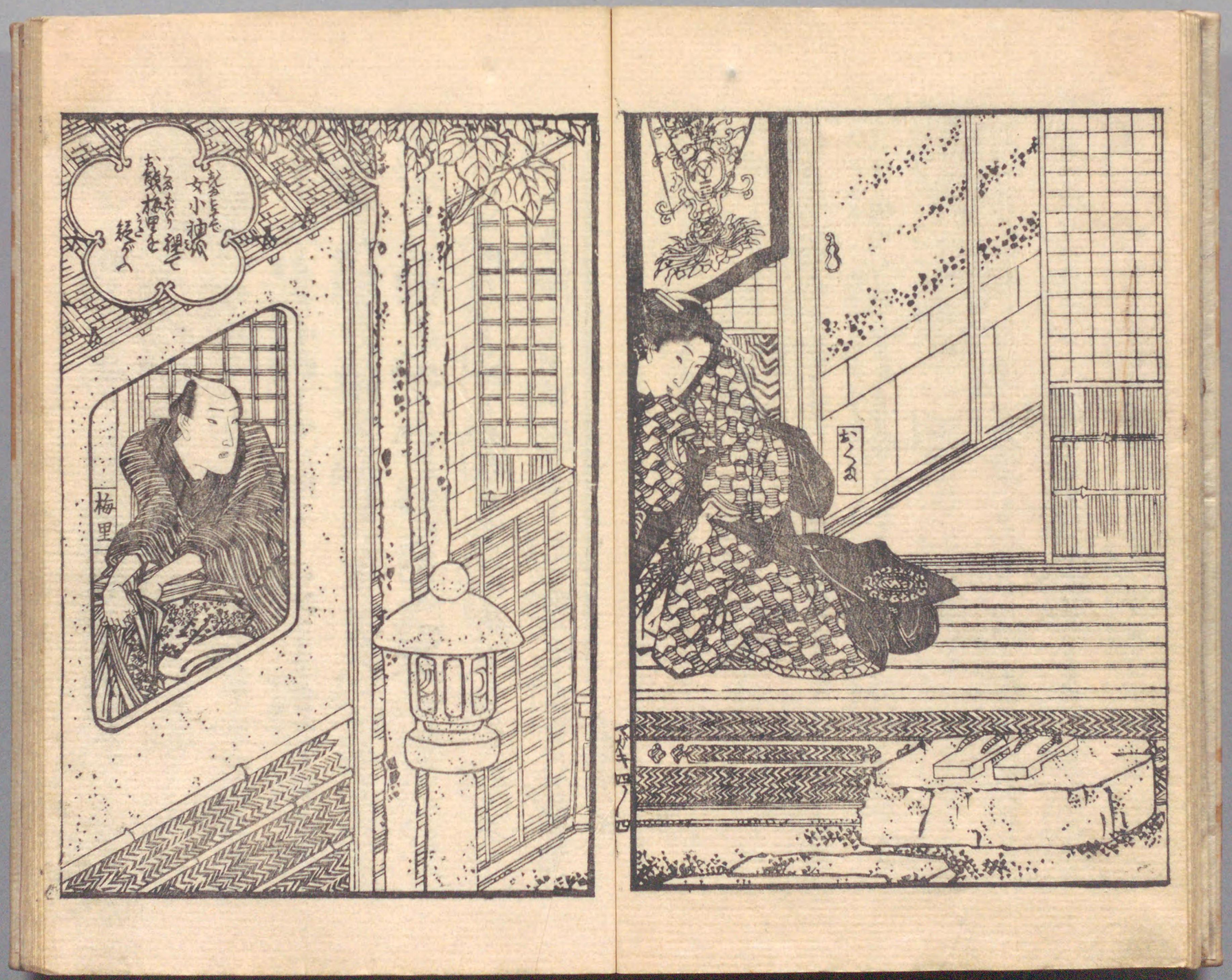
悪ひと思ひて　ばくるくるひ自分で氣ちが多分まるくくばかりの人と
氣ちが　関と女がおきのあハイ氣ちハ何ばくるあきとひが胸の
腫と痛が痛くて堪へゆくひと　何でも変
変でハるひと思ひきくとそまくるくる　鳥雅さんもお花女も記
あて相談して夜中ふお医者さんを呼びて来ひて貰ひて所が
地の様か自由ふ医者さんが来ひ　大さんハぶ様して溶く
ふ夜の明方ふお医者さんが来て　異きまくるくるく
癒ばが出来ひと　例でもくこのうえ　十二子その医者

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

さるの癒治するとのつよ分て祝が明てうつ又ゐ六人
もお医者を頼んざ所がやう〳〵六人目よおゐのお方が美を
ぬぎ下て先とを脱して苦痛のあひ様ちく〳〵
代腫物が治り限とりふ変こふ不行きよ見ぐらが見てハ往
おづく〳〵あるゆハ遠ひあひうち私が上る薬ゆりて半月も
早く頭根の湯治よ行が能ひ代腫の日の三日もること代腫
物が又胸のあり首のまりう人吹ぎとも都とるひ行平を祝ひ
中ふ湯入往て濡ふうまるを逆上し乳を下して胸のも自然と

散て治るうち出もちやく〳〵左根するぶい〳〵五六合く〳〵山奥に
あさ中ひと毒と脇毒のあるが出来あが上るひうるを延うてハ
行あひとりふ〳〵於玉女ハまと顔の腫くさのを鏡で見て祝う
ぐりて注てお玉ぐ子島雅さんもある花女も梅里さんへ行して
病気で連て帰りてハ濟あひ〳〵山方へ知らせびくよ方く一の
変ぐあるく時ハ猶きるびるんでも鎌倉中のお医者が
郎いるのを只一人薬をお呉のお医者さるの言のを聞ぐて
湯治よ不行ハ放ち帰りて来るも浅雲変ぐうの行でも癒治ケ



国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

第一ごと評議を極てそれゝゝ私も同使ゝ湯治場まで送
て往て二日のゝハ案ずゝらまるゝゝ於玉女ゝ分て居まゝゝが伺
ふゝ湯治ゝ相談する振で男ひの外ゝ元氣が出ておまゝゝゝ
兎てものゝゝに全快まで二週ゝゝゝ三週ゝゝも変方が延らんゝゝ
相談ずゝゝ私たゝゝ帰りて来まゝゝが之又おゝゝさんゝゝゝゝ
島雅さんを進めて旅ゝ日を延ば振る堀稼で急角本家へ
帰るのを遅くする振ゝ光成ごゝゝ伺ふも合点がいきません
全体ハ島雅さんが此ゝゝせゝ先へ帰りて来振とおゝのゝゝ

マガキ四ノ五

於花女ゝ不義ゝを言て栄女と新蔡が分て居るゝゝ女ゝゝ
でも急ひが島雅さんがおゝさんゝ分ておくゝ梅田さんゝ
居へてもるゝゝとのゝ私も御稼が私の居ひの上紙
幸ひゝて伺を義ごゝ初ゝ急ひと氣が分ゝゝば片時も
早く帰ゝ度ゝて来まゝゝ早く急て来まゝゝが紙
温泉ゝ嵐れ御玉成まゝとねゝト矢ひごゝゝ梅田の顔を
視る湯上りの様子身ゝ急ゝの上品ゝ嬢ゝ見れゝる
風も多く日ゝもあけば孫ゝ嬢の姿ゝるゝが生れば

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

久しぶりにて梅里ハ視惚て放心と又た持煙管を取落し
梅「ホイ是ハあやまり手も足でも安心だ　米「ヲヤ何が安かでへ
さるまいし　梅「エヽナニサお米が他人より早く帰つて呉るからヨ　米
「アレサお前様戯言ぢやァありませんヨお玉さんのお上ハ
お前様じやァありませんの〳〵　梅「ダヽお玉ハ幼稚のくせに〳〵でハ
互の身ハ何よりかお米の顔を見るのが安心だ　米「そんなら
お米さんハ気味のわるひ事様な小児を欺し物言をなさる
で何ぞ私の気休めをいつて油断をさせるのだらう有まいのか

梅「アヽ〳〵帰つて来るをまつそろ〳〵おもひめるのさ　米「ヲヤ何ぞ之人ト
梅里の顔を自若と視る　梅「ナニサつまらぬ嫉妬をまつたじめる
のさぁのヘのサ　米「ヲホヽヽヽとまぜつてもお米さんが何ぞうまし〳〵
お言ぐさ　梅「いやしひと言のが来まるヨそれよりか寝早衣を
着かえ風を引ハナ　米「ホンニ左様でござりましたッけト言ながら
立て少女が出し置る常着の小袖結城の茶弁慶黒繻子
の半襟かけたる紙浴衣の上へ引かけて　米「旦那へ　梅「ハイ
何御用ござりますト丸窓の前に二三歩の間をて返事をすれバ　米「ヲヤく

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

いつ時のあるよう甚行へお遠入身すりくさま伊を成ンでござるまゝ
エト選て見まゝば梅里八女の小神と女芸者見居茂へ色こうけて
居る中家お鶴八あやしく男ひちらを見こる所視ゑ知られ
芸を衣類あまゝば ちらを入 ゑ〳〵 そまゝ八 雑人のでござる
まゝ人トのつより早く風景色を引様を中をあけて ゑ〳〵
好意を及るものゞト顔色を変て 梅〳〵 ゑ〳〵 衣裳
を見て注顔をするのゝ そまゝでもお茶うん 私が些の中
ちゝる歯寸 ゞゝゝとりて 小張ゑ あを家内へお置るさゝ

でも 縁ぢやゝ あゝゑ せんゝト 身とゝゝハして 注て居る
ゝまゝハ 伊者の衣類ゞとりゝゝ 彼小演の不新着ゑりさて
小演とゝゑ島八 ひゝてゝふ おゝゝとゝ おゝの変を関て 相談〳〵
兎ても 左張ゝ男の小が 居るを おゝ〳〵とゝて 小家ゑ
島雅と 拵ひ 帰を ゝるを 待て あらんも 私りゝて 梅里
ゆハ そまゝてゝゑ〳〵 世話ゝゑるのゞ 亂の義ゑまゝば まゞ 伊ゑへ
ゑりゝも 仮住居を ゑ〳〵 変ゝ 伝 両女ゝも 食の都合ゑ
ちゝてあまゝば 訪春の通ゝ ゝふ 伝て 見ゝゝと まゝゝふ 言ける

梅里の匂ひも一旦去れて後ところ〳〵きゑ渡るも
あるべし　島雅小演の変ハ
おのの変ハ血縁のまゝ〳〵変ハ
道理なり是非お鍬こゝもさバ
元来お島の身に分てハ梶原家の市姫公へ預ケ金も
ひらる事其好ミ仕せ小演の見立ー家を借さゝて家賊
等を潰し今朝やう〳〵ま家へ二女とも引移しかれど
此衣類が梅里の許へ残ひらゝまゝ島雅も

梅里ハ お鍬を頼ミて別屋ー後
どゝ〳〵するあるよう〳〵小演の変もまた
変もおなじに関せて嬢ーしがるべき筋ゆゑ梅ハ両女のこと
いろゞお鍬ニ告げ〳〵クバ意ゲハ発明のお鍬ハ
ぜも神ゆゑ〳〵ぬ身の前身のを知るべき理なけれバ
女の衣類ある紙見て後ハのみおとゝて歌くも理
なるぬ
梅〳〵お鍬ハ変ニ腰を立ちんなヨ

なを「ナニ腹を立まして」とちつて「おゑきさんが左振りの乳を
梅「コレサ〳〵手荒遠のをして」後日矢八是きさんなぜ衣
裳をくゞり乳を情人のある婦人のごとくかくして乳を
りゝ束ハ多ゝゼ なを「左振サ」おゑきさん也情人ゝ丁ゞ雄人
でもあるまいゝ人ぐるわまをんのサ 梅「あゝハちやうゝ左振先
潛ちやうでよく〳〵聞ョ」ける中おゑの苗字ゝ人
ちやうも義藤のゞ二人来て居て此臭ゝ人の振ゝ問ゝせ
たらうゝ笑ゝ切ッゝナ

第八回

梅「ヲイヲイ」お藤よく〳〵考へて「おゑきさんが江の島人佐ゝ苗字の
同ぐるわゝ外も他の女也家へ引ぐり込むがの濡場をする
馬鹿と思ひて」異る変も多ゝゼ」は衣類ハおゑきさんハ知れて
居るぐらゝ元ハ和泉町ゝ呉女也ゝて居る小濱とゝいふのごとく
なを「ヲヤ其時分ゝ家内へ呼んぐ客人の
久 梅「コレサ半分ハ」きさんゝ人ゝ左振先ぐるをするゝ
移ゝ此臭がゝ人ゝをよく聞てゝ腹を立ても嫉妬をあるも

仕合せなる「ナニ兎ても私が伺と思ふことてもなく久しい
お別様のあるうバ別段不及夏てあやまりがそなたぶつ言
て初めの私の心の中をもおくみしーナて伺のも一途ニ野暮な
涙だ　梅ヨライ〜コサ衣類の勝がまあうやく済バかの涙どころ
もて注夏も強ト平氣で居る　梅里の風情ニお様ハいやく
悔〜〜勝ニすぐて身ハ　ふるハ〜〜　泣て居るのを梅里ハ　ふるハ
ふるハ〜〜小濱とお島の夏をふハ〜〜　ねぐうお花おむと出合せて
和合さそるとそこをいひ　伺まお様ニ頼むようを言けまども

しのぶ半分い結ひの髪そ　「まんざらお花さんの姿伺のハ當歳
ませんヨとまとぶけまぶも思さんのお島さんとやしハ実ふうも　知ま
ませんがもう小濱さんとやらハふうるお花さんの情婦ぶ　梅「ちん
ふうバ左様思うて居ると人ぶ　扨て成人ぶ帰うて来まぶ解まぶまうー
お島さんの夏ハお屋敷の少毎公さまのうち三百両とのハ金を預て
居ま〜〜　お花ハ姉の夏ふり　此方の勝ふらーー　ふるふうて
義理のふるひ　扨ニ思ハまるぶらうう　宅ふ伺ふくるぶ伺扨ふう
冥ふうのウ実お玉もお屋浦のも素人ぶうまぶけぶ　ふるふうのと

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

心配して居るのサ　「ヲヽ」唄女あげくるも私の孤な野暮があと
ちらしハ　梅「ナニお姉の八男ぶうをしがるを寄て並のごとトの人所へ小女
のおこゝが勝手より次の間へ来て　「旦那さん婦美川の寿樂
きんがおかうをうるまーと　梅「ヨヤ左様ゝ此ろ人も通ゝ合さるまーと
言ふ　きん「ハイト立て行き然ハ顔を拭て衣類を装直ー　帯紙
ガて姿をつくろへ梅里ハ三味を出て立あくの間へ出る小腰をゞ
やて彼嘉樂ハ障子の際へ　寿「ヘイ旦那此ろハでハどざる
まきん一肥見ハ有ざるへどんゞ出る宅ハ家ト毒

子実ハ　梅「よくおゝ成さ成ゝ此間送入る世人サヲヽ
此方へ一肥見ハ大きゝ世話よりやゝとの人折ろあこハ
寿を持出る美味食を直ル　寿「ヘイとまハ有ざるへどざるま
を　梅「トキニ此ろ中ろ小演が教度あ赤の世話よろこくあ
ヲヽ今初引越ゝ来ざる　種くおこを言て用をうのむ
変さらへ氣の毒ゝ此身もあるろ性て考るろざるが家内
ゆも多くの用が出来てまゞ性是ゝ　寿「ヘイ之今日旦那が
変ろ入ゝでも宜ざるませうが急ゝ私が上るまゝこの人

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

小演さんが何様しても関女さで出るうち相撲屋の西宮の変
左様りて呉まろ今日是非相談を極度とせちゃみく
お頼でどざるまるが何様りてしものう島波貴君お身
中ふとりまるさ　梅ーナラー其様なるとハ弟とよびて歩稽て
亀て呉る何も多くの様なる真似をあるひでも能身ぐハナ
アーー程よくー命ぢて日を延して亀て呉るまるハ旅へ出る
連中も帰りて来るうち時のまるよ仕度もんざ　参「イエ
ときと中ぢるもふ二女ぐう義兵のふ年齢ハまー殊ふ小演

さんハ二三年以前ふ引込時分彼地でも流人情ーぐと唱女流
でどざるまるうち此号中私ども出るう遠入うう幾歳のを着ご
ものや以来うう知りてこのものがあるふ進ある様ふでどざるまるのサ
ときふ　お島さんうを再勤のたまるふ新様で連て相悪で出るを
おこひまるものごうう中裏の者も剛付て彼是言込て来る
まー小演さんもお島さんも金ハ借ぶともいくとのへのでおー
娼妓屋の勝をあるうう二の是を踏で居まるけども今
うで両女が十分の衣裳で出様ものうバちゃモウ大丈

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

丈でどざるまする　梅　押出しても見度　振みんでどざるまする
のサ　梅　アヽ〳〵〳〵お茶まであがおしを勧める伴るざの成程場所
がらようやうの冥土ハ出し成と思ふも古地のあざやうら悟くも
あれば両女を左様しても伊様も此身が濟ぬと言所へ
お熊ハ仕様をして出まる姿幸塔を又どもあざやふふうく
あきらの戦果とするどざり　梅　寿楽さん此ろハ
久〳〵お目ふうちあれ人今日ハ
とても伊時のろうお帰りでどざるまする子まぢ米を丈が帰宅

ませんの内　旦那が伊ともおもしが分ら理ませんうち此ても
ぜんドまーまんざ伊時お帰りまする　梅　只今
帰りて湯へ迎入るどざりどざナ　寿　ヘエ左様でどざるまする
左理で誰人もお帰りの時をいとーません伊でどざるまする
成人さんも真に　梅　イエ私ども先へ帰りて来まーうハ
伊様も旦那さ油ぬが有うあれ
まーこヨかーの同家をあけて主人家早おしみ丈が有度ある
ト言ものう勝ぬの方へ向ひ　梅　お三や今の丈早くと左様

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

言うて栄さんをヨトのひつて又、壽樂さん向ひ
壽樂さんお茶も
同様に江の鳴人おかまう冥さ隠ぷとりおりろく探んで
来まし　壽　左様でござるまして　さらうとも此度は新参と
米屋が大仕合でござるまして　代と長ろう具那がお出な
さるを沙汰ろう由承ると私がお供をするまづふお頼ひやて
おきまして　壽　ヤ左様久其中へ名見湾の栄さんも入て
お茶と由さんと嫌知をしるがらお出なるべく　壽　アヽヽヽ
イエモウ　私ハ栄次さの情合ハ男ひ切るつもりでござるまして

こがね四ノ十五

壽　ヨホヽヽヽ　ござエ　壽　エイエ　金さ私がお客さ多ぐらるまして
此ほりまして町へでも来るつもりでござるまして　老実ふ
なべ　梅里もお願も吹出して　梅　アヽヽヽ　ヨホヽヽヽ
壽　おうのれ　具那人　梅　エ　ろんとつて栄さんと由さんと
情人でござるまして　梅　さるバサ　金さ　和合うう　実　正
うも知まれ人　壽　イエモシ　具那　私ふ気をもませる様さ
てシタトまもどざるませんな　壽　ヨホヽヽヽ　お茶ハ今男ひ切る
お言ひぢやア　壽　イエまでも　金さ　公よくござるません

梅「アハヽヽヽ何所までも老実る中が可笑トいふ訳へ
お祭が言分て生ッと思ふて酒者紙お三ハ座敷へ運び
来る　サア喜楽さん一ッおやるの　喜「ヘイ是ハ有がとう
ぞんじます　ト おまちより盃の受をきりよろ〳〵
おやまを初ておもしろ〳〵　彩ふ　梅里の本宅ハ清絵〳〵　忠「ハハ
臭も世ッ〳〵　山所へ毛ハ来り　真ふ式席へ出て　忠「ヘイ今日ハ
ヤ　姉上さん山ろ中ハ　梅「ハイト言ふ顔色よろこぶを見て
梅「ヤ〳〵　鳥を切て頼まる悪〳〵　何程ふ成さのう

梅「途中で何程ふ成さのう　忠「イヽエ　ナニ左程でハどざりませんが
鳥雅さんが箱根ふ花柳を生きて〳〵ふる紙を見るを
真ふ花んで参ッ〳〵　梅「ヤ何ど大変な変てる事さの
でどざりますう　忠「エイ　お玉が毒気で姉上さんが先へあちらを
おとるもろこ迄でもひど〳〵見脈がよろ〳〵ありて来さのふ
鳥雅さんも病気で動止来ふ分て温泉所の医者よかく
つて薬を貰ふとのふ程ふ病ざります　私ハ立て来て居ろと
ふ状でどざりますが何程ふ〳〵　梅「イヤ　ヒヤ大変ど

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

国立国会図書館　春色雛之梅 15巻 208-693

ガラス使用

なるほど直ぐに立て行がよろしうござんす　梅「そりゃア私がそこ
へ立て注ませうか　新孝さんや米吉さんが対てゐ居ますけれ
ども　お花がさぞ気をもんで居ますでしょう　梅「ナニお花が
又待つことの外て両個の病気がよくなると云ふ道理もあれ
ども　そりゃ出も早く忠こうて歩る方がおもも気が丈夫にな
るだらへから左様して貰ふが　忠「左様なら車に唯今うら
支度をいたして　梅「左様サ　よく考へ　梅「うんと寿楽
さん余て多分　ばがお塚直ぬ此男子と温泉場へ行て

遊て暮らしたい出来ないのへイ行くのもひどくお案じ
成ますで私も出来ません　知て居ますこと程の
変てどうもまたうお役に立てども車に出掛をいたしませう
梅「イヤそれは早速の出義和で難ありがたくお願ひ
まして忠こと忠寿楽の二人此座居ての支度を相へ
ばで旅にまりましけれ
○さて芸者彰角て酒の相手を挑ての伽とのこと知て居る
さんは町家ハ元来武家にても彰角の顔を

208
15
693

霧一雲るくハけ葉常に滑鶯おつ一ミのこを訪ふと
ちる梅の見ども散度なりて あらぶ万るに変ずれ
見那一方の用を見ぬ すミ中めて思ひの外 老実なれ
役を勤め如を為けるハ大家の且形も大変の用紙類を巻八
変孫一うぐゝと家一夏

春色籬の梅巻之四了

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693
ガラス使用

208
15
693

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用

国立国会図書館　春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用